ラトガース大学での2年間を振り返って

大学院ヘルスバイオサイエンス研究部 食品機能学分野 助手
室田 佳恵子 むろた かえこ

受入先研究室の様子
(上)発表したポスターを掲示した廊下
(下)使用していた実験室

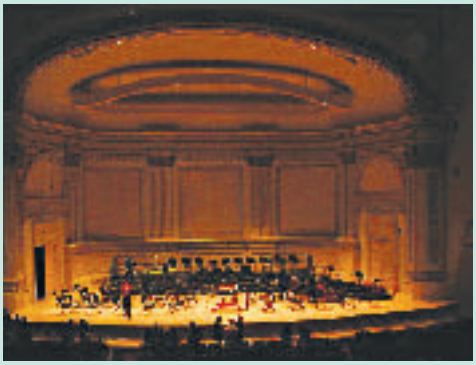
2002年9月より2003年8月までの1年間を文部科学省在外研究員、その後研修として再渡米し2004年8月までの合計で約2年間という恵まれた機会を得て、アメリカ合衆国ニュージャージー州ニューブランズウィックにあるRutgers大学で研究を行いました。Rutgersは現在ニュージャージー州立大学となっていますが、合衆国独立以前の1966年、アメリカに8番目の高等教育機関として設立されたQueen's Collegeを元とし、その後多様な分野へと拡大しながら現在の総合大学へ発展した由緒ある大学です（現在医学系はRutgersと関係を保ちつつも別組織である州立医科歯科大学の一部となっています）。

受入先はCook College（農学部）に属する栄養科学科の研究室で、脂質の腸管吸収機構に関する研究を行いました。ご存じの通り今アメリカでは肥満が非常に深刻な社会問題となっており、当学科でも主な実験系研究室では脂質栄養、肥満研究や、肥満治療のための手術やダイエットによる生体への影響等の研究が盛んに行われています。筆者も何とか2年間の成果を論文投稿までこぎ着け、今後も共同研究を続けて行くことが出来そうです。また、Rutgersの栄養科学科は隣接の食品科学科と協同して管理栄養士養成課程の中心を担う学科でありますが、同時に基礎栄養学を行う場として大学院生の教育も行う研究科でもありますので、アメリカの栄養系大学・大学院の実態を見、そこで学ぶ学生の話を聞くことのできる貴重な機会ともなりました。さらに、関連する食品科学科や薬学部等の研究者とも共同研究やセミナーを通じた交流を持つことが出来ました。

滞在したニューブランズウィックはニューヨークとフィラデルフィアの中間に位置する言わば古くからの宿場町のようなところで、アメリカでは珍しくローカル鉄道で大きな町に行くができます。研究の合間にアメリカの歴史と文化を探索しに気軽に出掛けることが出来たことも大きな楽しみでした。

最後になりましたが、法人化等不透明な変革期に2年間という長期に渡って不在にいたしました際にお世話になりました先生方に改めて深く感謝いたします。

受入先研究室の主要な研究対象である
脂肪酸結合タンパク（FABP）の構造
（青は脂肪酸）



ニューヨークの 風景
（左）カーネギーホール（コンサートの後に）
（中）ロックフェラーセンターのクリスマスツリー
（右）ナイアガラの滝（アメリカ滝）